



TITLE:

西[遊]夢録(二十六)

AUTHOR(S):

瀧川, 規一

---

CITATION:

瀧川, 規一. 西[遊]夢録(二十六). 地球 1929, 12(5): 381-385

ISSUE DATE:

1929-11-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183680>

RIGHT:

# 西遊夢錄

(二十六)

## 瀧川規一

### 蘇國の部

「グラスゴ市の辻演説　辻演説で有名なのは倫敦ハイデパークの入口の片隅で行はれて居る辻演説である。何時行つても二三人の辯士が持參の高脚臺の上から聲を囁らして獅子吼をしてゐる。否獅子吼の積で居る。論ずる處は或は宗教的説教、或は政治社會問題であり時には立場を異にする辯士が吳越同舟以上の混戦をやつてゐることがある。毒と藥を同時に賣る藥種屋と同然、相反する理論の店を並べて平然としてゐる。舊教の説教師、新教の福音を説く者、心靈派の怪異を喧傳する者、救世軍の赤帽等八宗兼學以上の展開振りを見せてゐることがある。辯士は何れも垢面粗服の士であり營養不良を顔に見せてゐる人達である。従つて彼等の議論は多少とも病的である。聴衆も亦伊太利の如くフアシストの演説に對する伊太利人程の熱心をもつて傾聴して居ない。只時間潰しに聞いてゐるに過ぎないやうである。

只一度英人には珍らしい辻演説をクラブ・ハム(Clapham)で見たことがある。毎朝七時迄に公園に行くと一人の辯士が頻に工場に行く途中の勞働者に對し煽動的演説をやつてゐる。

近所の女中が家の門口の階段を掃除する爲めに水道口からバケツに水を入れてゐる。そのバケツを借りて勞働者は水を辯士に振りかけて行く。辯士は怒もせず熱辯を續けてゐる。次から次へと辯士は閑伽の洗禮を受け水がズボンから下垂つて居る。それでも辯士は平氣である。辯士は相も變らず群をなして工場に通ふ職工に熱辯をふりかけてゐる。宿の主人の説明によると「あの男はあれで有名になつてゐる。場所不明な處から發せられてゐるのである。職工等は働かなければならぬ。彼は働かなければならぬ職工を亂せば糊口が凌げるのである。

毎朝そこを通る職工等はそれを知つてゐるので水を浴せるのだ。全く氣狂ひだ」と云ふ。

さてグラスゴ市は人口に於てエジンバラ市を凌ぎ大英國の第三位を占める大都會である。蘇國の生産工業及び商業の中心地である。人口百萬に近いと稱せらるゝ大都會であるが、都市の大半は遺憾ながら黒く煤けた建物が密集し外觀只汚い印象を與へるのみである。専門家以外の旅客には餘り遊覽に日を過す價值を見出し難い。グライド(Glyde)河を挿んで長

いゝ航程の間ドック會社の作業場が門戸を並べて空ドックの鐵柱の見苦しさを空に曝らし不景氣の暗翳をなしてゐる。この光景を見る時この大都會は美觀を誇る都會に非らずして汚觀に生命を見出してゐる都會であると印象されるのである。往來に行通ふ人々の服裝も亦彼等が有閑を樂しむ者に非らずして有閑の苦を訴へる底の人々であることを教へるのである。倫敦やエヂンバラ市では折目の正しくない洋服を着て肩身を狭くしてゐたのが、グラスゴの市街では寧ろ折目正しいのが人目を惹く感じがする程に通行人の多くは粗服である。

ホテル附近の往來の裏角で毎晩五時頃になると滔々懸河の辯を奮つてゐる辯士がある。毎晩定刻になると出かけて拜聴する。當時スカールボロ(Scarborough)で開かれた全英勞働大會の議題の一部とグ市勞働者の窮迫打開策とを辯士は述べてゐる。お定りの如く辯士は垢面粗服である。服は油に塗れ黒光りの光澤さへ發してゐる。圍集して傾聴せる群衆も亦垢面粗服の徒である。辯士を圍繞する群衆の環の外輪に佇んで耳を傾ける。辯士曰く「スカールボロの會議に於て大英國勞働黨の首領m氏が最高委員會の委員等によつて大英國勞働黨の最後の決心と確答とを促された。この最高委員なる者は當時露國より潜入せる密使或は露國系の主義者等によつて或は動かされ或は同じ傾向の思想をもつて居た連中であつた。大英國勞働黨が露國勞働者及び彼等の主義と提携するや否やの決定を該首領はその時なさなければならなかつた。この時首

領は實に簡單であつたが肺肝より出でたる堅き熱ある答辯をなした。『大英國の勞働者は大英國の勞働者であつて露國の勞働者に非らず。大英國の勞働者はその日に苦しむと雖、自己の處置をなすに他國の智慧を借り他國の援助によつて生きんとする者に非らず』と答へたので、露國勞働者の運動と絶縁することになつた。その後新聞に傳ふる處によれば間接直接に露國より英國に或る種の送金のあつたことが曝露された。辯士は更に首領の意味を補足して曰く「首領の云へるが如く大英國の勞働者は露國の勞働者に非らずまた有色人種の勞働者にも非らず吾等は吾等の問題を處置し得る能力を有す。グラスゴ市の勞働者も亦グ市に於て自らを處する方策を案出す可きである。吾等は窮すると雖も Brissler たる自負心を忘れてはならぬ。現今の難境を切抜けんが爲めに他國の援助を藉つてはならぬ。吾等はこの難境に處する第一策として家を與へよと叫ぶ。家畜としての家に非らず人間としての家を與へよと叫ぶ。

子弟の教育は忘れてはならぬがその他の點に於ては暫く忍べ。現在以上を要求せず一陽來福を資本家と共に待て。國家が補給する廢身救護金(Pension)を實施するにしても眞に受くるに値する者と値せざるものととの區別を慎重にせよ。而して有資格者に増額をせよ云云」と云つてゐる。

彼の勞働論策にも興味がある。然し現筆者にとつては演説者の口にするグラスゴ譚が一層面白い。倫敦の辻演説にても

これが面白いので、暇ある毎に出掛けては倫敦訛を手帳に控えた。今も丹念に彼のケ市訛をフオオチツク式に書き認める書き認めながら思つた。勞働論は地球一般共通である可き管であるのに何故に辯士は人種の差別の言を口に洩らすか。祖國の斯道運動者等が稍もすると勞働論の蔭に人種の差別の秘めることを知らずして只外皮のみに共鳴し國家を擧げて被宣傳國になることを誇とする觀がある。學者然り運動者然り未だ國外に宣揚し得た攻勢的精神運動のありしを知らず。常に受動的に他人の揮撥きをやつてゐる。彼の訛に興を感じ彼の言説に些かの不快を感じてゐると、いつの程か査公が傍に立つてゐる。査公は何故の筆記なりやと質問する自分は言語研究者で方言や訛に興を覺えたので書き認めたまでであると云つたが、手帳を取り上げられた。

今までの興味が一時に消えて早速ホテルに歸り査公の來訪を待つてゐたが遂に手帳は返へられなかつた。

【伽藍と墓】蘇國の文豪スコットによつてその小説ロブ・ロイ(Rob Roy)中に紹介されてゐるので先づ伽藍に足向ける。修辭最中の伽藍は左して見るに値するものが無い。案内者の説明によつて指示されたステンド・グラスも彼の説明程のものでない。本門を出で左に折れて所謂歎きの橋(Bridge of Sighs)を渡り全市を下瞰する高臺の墓地に入る。墓地は清淨なる靈域ではあるが巴里やエザンバラ市の墓地の如き古めかしさが無い。高いジョン・ノツクスの記念塔も只高いと

云ふ丈けである。

「ケルヴィンの森」墓地を出で、何處を見物す可きかと思案せる折しも、墓に手向けの花を供へてゐた一婦人がケルヴィンの森(Kelvin Grove)まで案内してやらうと誘ふ。ケルヴィンの森は今は公園となり居り遙か彼方の高地には大學の巍然たる建物を見上げ一帯は窪地となり居り樹木は處狭げに鬱蒼として生え茂つてゐる。樹間の花畑を樹下のベンチに憩うて半日を眺め暮らすには好適の庭である。

「急ぎませう ケルヴィンの森に

森の木陰にうろつきませう

谷間は薔薇で蔽はれ

夜半には仙女が舞ひまする。

行きませう、あなたと水車のほとり

小河の小屋に 手をとりと

瀧の水音 鞆々と

谷に鳴り 岩の館に響きまする。

の歌の主題のケルヴィンの森に今しも憩うてゐる。歌にある美しの娘(Bonnie Lassie)の姿は見えぬ。墓から道伴れの女は未亡人であること。彼女の夫は大戦に戦死したこと、佛國の戦地にある墓に昨年詣でたことなどを語つて足早にいくにか立ち去つた。男女の二三大學生らしいのがお安くない様子を見せて樹間を逍遙してゐる。森を横切つて大學に至る。生

憎夏季休暇中で訪れ度い教授は悉く不在である。校舎を一覽するに止まる。

附近の美術館 (Art Galleries) に入る。倫敦に次いで名畫が多く集められフランダ畫派和蘭派ヴェニス派等の名畫が陳列されて居る。眞實何れとも鑑定する能力をもたぬ觀覽者は只目錄の説明によつてその有難味を歸納する。詩人バーンズ及びカーライルに關するものは説明を俟たずしてその興味が自ら湧く、船舶の歴史的變遷を示す爲めに原始時代の舟から今日の大艦船に至るまでの船舶の模型を數多く陳列されてある。汽車電車等のレールの見本も澤山並べてある。一々叩いて金屬の性質を試す爲めに木製の槌が備へ付けられてある。時しも二人の紳士がその槌をもつてレールを叩き鐵質の差異を論じてゐた。遺憾ながら専門外の者にはどのレールも只カン／＼と響くばかりであつて鐵質や軟硬等の差異を發見することが出来なかつた。

### ハミルトン公園

スコットの小説 Old Mortality のう

ちにモンマス大公 (Duke of Monmouth) の許に率ゐられた國王軍とカヴエナント (Covenanters) と稱する長老派の教會軍とが一六七九年にホスウェル・ブリッジ (Bothwell Bridge) と稱する橋を挿んで對峙し激戦をなしたことを述べてある。

ホスウェルの城は既にクライド河口を溯航する時甲板の上からその美しき庭園と既に廢墟に等しき城とを遠く眺めることが出来た。只この橋丈けが見物の一として残つてゐる。早朝

よりこの橋を見物に出掛けると豈圖らんや小説の説明を裏書すべき何等の痕跡もなく今ば電車を走らすコンクリートの橋となつて居る。

些か失望の心地で目的とす可き處もなく、ハミルトン公園 (Hamilton Park) 附近を逍遙する。破れたる垣間から公園内に足を踏入れると間もなく五十歳近くの紳士が肩を叩く。「今日は公園を公開せぬ日である。日本人なら特別に見せてやるものがある。町役場に交渉してやると云ふ」その親切にほだされて紳士の後に従ふ。公園の一部に少年隊が蘇國の服裝整々しく美しく裝ひて蘇國の樂隊を奏して行進をしてゐる少年義勇隊のマーチを神社などの祭日になす以上の賑々しさである。暫見惚れてゐると巡査と件の紳士とが來て、向ふの塔に行かうと云ふ。紳士は「あの塔はハミルトン大公が祖先の靈柩を安置する爲めに建立したのであるが、印度から木乃伊を盗み來つて塔内に置いた。その祟を受けて塔の地盤が陥落し始めた。木乃伊事件が世の物議を醸したので、夜間秘かに木乃伊を何處へか運び去つた。今は危険であるので何人にもあの塔の附近に近寄ることを禁じてゐる。自分も何時か塔の内部にて靈が反響して人間の歌を返へすと噂せらるるのを實驗したいと思つてゐる」と云ふ。塔の附近に番小屋がある。紳士は番小屋の主人を尋ねたが不在である。十八歳だと紳士が云つた小娘が居る。紳士は小娘を連れ出して塔内に入る。番公は塔外で番をしてゐる。塔内に入ると紳士は自分に或る

一定地點を指して其處で歌を歌へと云ふ。

唱歌や音楽の教育を受けなかつた筆者は異郷萬里の外にあつてその方面の不能を謝せなければならぬ。娘はこんな題の歌を知つてゐるかあんな歌を知るかと尋ねて呉れる。紳士は余を指して「日本の紳士とは未だ握手しなかつたから改めて握手をせよ、然らば何か歌ふであらう」と云ふ娘の握る手の柔さを感じても歌の「う」の音さへ出せない。仕方がない男だと見定めた娘は紳士に向つて蘇國讚美歌を共に歌はうと云ひ出した。兩人の聲は出来る限り低聲にしやうと申し合はせてハレルヤの歌を先づ歌ふ。低聲なりし歌聲が明瞭に且つ朗かに響き返る殿堂内にあつて或地點と或地點とが音波の合流によつて返響を強くすることは既に倫敦の聖ポール寺内であつた。後にはミランの寺院、米國ワシントンの議事堂内にもあつて多くの訪客が面白半分に試して居る。事柄そのものは珍らしいことではないが、今は兩人の聲の美しき合唱に興がある一回二回と讚美の歌が繰り返へされる。やがて塔外に待つてゐた查公が咳拂ひをする。

紳士は急に自らの聲と娘の聲との魅力から目醒まされたが如き様子をして「查公がやいてゐるから」外に出やうと云ふ。娘は笑ひながら吾々兩人に握手をかへして共に堂を出る。查公は吾々に向つて「餘りにお前等は長過ぎる。二人の紳士と一人の娘とが塔に入つてあまりに長く姿を現はさないので心配した」と笑ひながら云ふ。娘は查公を省みて「あなたのや

うな若い紳士と一緒に入ると永久に塔から出て来られなかつたかも知れぬと妾も心配する處だつた」とやりかへしたので蘇國の紳士は「娘出かした」と褒める。やがて三人は娘と別れ少年樂隊の處に来る。日は既に傾きはじめホテルに入れば夕食時となつてゐる。豫定の日數よりも一晩遅れて詩人バーズのエアシヤ (Ayrshire) の名所を歴訪することになつた。

エアシヤの旅は一日にてもすませることも出来或は數日を費すことも出来る。蘇語研究殊にバーンズの詩にある各地の名所を出来る限り探るにばどうしても數日を要する。エアシヤの蘇語を知るには成る可く田舎のホテルに泊りバーリに入入して教育のない連中の話を耳に入れて耳の練習をなす必要がある。時々バーンズの詩を朗讀せしめ音楽となり居るものはこれを誰かに歌はして見ることも必要である。そんなこんなで思はぬ日數をエアシヤで費して了つた。エアシヤを去つて英蘭の湖沼地方に山水の絶景を探り詩人ウアーズウアス (Wordsworth) の遺跡を探ぐるにまたも數日を費し更に東海岸に横斷してニッカーズル・オン・タイン (Newcastle on Tyne) やウィットビ (Whitby) を探りリーズ (Leeds) やノーク (York) に日を過して思はぬ長旅となつた。(終)